

### 3. 高令者麻酔の問題点

(麻酔科) 藤田 昌雄

岩淵 汲・三谷 仁・横山 和子

○山村 佳江・矢幡 一成・鬼頭 淑

最近4カ月間(昭和40年12月~41年3月)に当科麻酔科で管理した60才以上高令者の全身麻酔例、100例について、統計的に分析し、若干の検討を行なった。

全身麻酔例総数は726例で、この内60才以上高令者が100例あり、全体の約13%である。男女ともその頻度は60~69才に最も多い。性別には、男子が多く68%を占める。手術の対象となつた疾患は、消化器疾患が過半数である。患者の術前状態については、脳卒中の既往歴あるもの、気管支拡張症のあるもの、高血圧症、心電図に異常所見あるものに加えて、貧血、脱水、低タンパク質白血症のものも多く、これらのうちの、なんらかの異常が認められたものは全体の75%を占め、全麻実施にあつては、細心の注意を必要とした。術中合併症としては、導入時および麻酔維持中の、高血圧、低血圧、徐脈、不整脈など循環系のもが多く、60例にみられた。術後に高血圧が持続したもの、無気肺を起こしたものがおのおの1例あつた。

麻酔が直接関係あると思われる術後死亡例はないが、吐物の気管内誤飲のために死亡した1例があり、高令者の麻酔維持、術後管理は特に注意を要すると考えられる。

### 4. 子宮内胎児感染の1例

(婦人科) ○児玉 京子・葉 晴漪

妊婦は34才主婦。遺伝歴：特記すべき事なし。既往歴：27才虫垂切除術。初潮15才。整、30日型。32才で1回経産、その際妊娠中毒症にて治療を受けた。今回の妊娠は最終月経 17/II/65~3 T. l. 中毒症は認められず。妊娠8カ月末で性器出血あり、前置胎盤の疑いにて入院。分娩予定日 24/XI, 28/XI 産徴あり、29/XI 子宮口2指開大で卵膜剥離施行。30/XI 午前4時陣痛開始、午前7時の検温で37.7°C、午前11時には38°Cの発熱あり。午後5時39分人工破膜し、午後10時29分に4050gの女児を正常分娩す。娩出時、児のApgar's Scoreは1分後8、5分後10で、羊水の混濁が強度に認められた。胎盤娩出後、子宮内清掃を行なつた際非常に熱く感じられたので、直ちに検温し、39.1°Cの発熱を認め、C.M. Succinate 静注す。児は新生児室へ収容していたが、分娩後11時間10分して突如呼吸が不規則になり、チアノーゼを認めたので、直ちにクベースに収容。収容後もチアノーゼ、呼吸不穏、発熱、痙攣発作が頻回におこり、ピタカンファー 1/2 筒、

テラブチック等の注射をくりかえし施行。分娩後26時間半たつた<sup>2</sup>/XI 午前1時頃再度のチアノーゼがあらわれ、ピタカンファー注射したが、チアノーゼが軽快せず、呼吸も浅くなり、Herzmassage等の効なく午前1時30分(分娩後27時間)死亡した。剖検の結果、化膿性脳膜炎と羊水吸引性肺炎が認められ、組織学的にGram(一)の桿菌が証明された。同時に提出した胎盤にも、急性絨毛膜羊膜炎と急性臍帯炎が高度に認められ、胎盤の胎児面に強いMeconium Stainingを認めた。分娩後褥婦の悪露を培養し、大腸菌100%が証明され、薬剤耐性テストの結果で、カナマイ注射す。褥婦は第3日目と第4日目に37.4°Cと37.9°Cの発熱を認めたことと、Cystitis, Urticariaに罹患したこと以外に特記すべきことなく、分娩後12日目に退院した。

### 追加

(細菌) 須子田キヨ

健康妊娠マウスの胎児から単癩菌様抗酸菌が証明されたので、実験的に鼠癩菌感染雌マウスに健康雄マウスを交配し、妊娠2~3週の間これらを屠殺して、母マウスおよびその胎児について抗酸菌の検索を行なつたところ、その胎児の皮下、肝臓、羊水、胎盤などから抗酸菌が検出された。感染雄マウス健康雌マウスを交配した例では、胎児からは検出されなかつた。

### 5. 食道肉腫の1例

(消化器病センター) ○今給黎和典

秋田 善昭

食道に発生する悪性腫瘍の大部分は癌であつて、肉腫は稀な疾患である。最近、消化器病センターに入院して来た患者の中で、レ線検査および食道鏡検査により、非癌性腫瘍を思わせる症例を経験し、病理組織学的検査によつても紡錘型細胞肉腫なるを確認したので、内外の文献的考察と共に言及する。

症例は46才の女性で、食物通過障害を主訴として入院。食道癌診断のもとに右開胸、胸部食道全剝、頸部食道外瘻造設、兼胃瘻造設術を施行した。摘出腫瘍は鶏卵大で、浸潤転移も軽度で、術後1週間目でr. pneumothoraxとなつたが、胸腔ドレーンを再挿入し、持続吸引により軽快、術後44病日で退院、現在なお健在である。

食道悪性腫瘍における肉腫の発生頻度は0.1~0.3%である。組織学的に見ると線維肉腫が最も多く、次に平滑筋腫、横紋筋腫の順となつている。1900年本邦では千葉大が食道肉腫第1例を発表しているが、紡錘型細胞肉腫は本症例を含めてわずかに4例のみであつた。

### 6. 高度の大動脈血栓症の1剖検例

(第一病理) 武石 詢